



岐阜県 廣専寺 住職

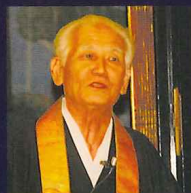
近藤 龍磨

こんどう たつまる

「ライブイン 浄土の真宗
「縁尊し」
8月19日(土)

1952年 熊本県生まれ。
熊本県天草市の光蓮寺の次男として生まれ、
1983年に岐阜県大垣市の廣専寺に養子
として入寺されました。現在は同寺住職の
かたわら、東本願寺修練道場において後進の
育成 指導をされております。

先生はご自身の法務や生活を通して、親鸞
聖人の教えや歩みをざっくばらんな口調で
語って下さいます。また大学時代から続けて
おられるギターを持って、演奏を織り交ぜ
ながらご法話されるのも印象的です。皆さんと
共に先生が作る独特の空気を味わい、ご法
話を聴聞したいと思えます。



福岡県 徳進寺 前住職

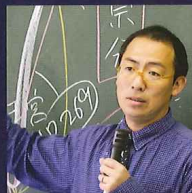
伊藤 元

いとう げん

「教えてもらってすぐわかる道」

8月29日(火)

1935年 福岡県生まれ。
御歳 80才を超えられた今も第一線で活躍する
先生。浄土真宗という仏道は師友にあうことから、
はじめ「仏道」という大きな道のりを歩む
私達は、共に歩む仲間や先生にお会いすること、
善き出遇いによってその道のりが開かれていく
という先生の言葉に傾かれます。昨年度の「聞」で
初めてお越し頂いて2度目の講演の場になります。
反響も多く、またお会いしたいという声も聞こえて
きました。今回も心に響く開法の間となることを
楽しみにしています。



大谷大学学長

木越 康

きこし やすし

「善導独明仏正意」

8月20日(日)

1963年 サンフランシスコ生まれ。
大谷大学 28代目学長。大谷大学で受けた
先生の授業の中に、忘れられない言葉があり
ます。それは、「真宗のお寺に生まれたから
真宗バンザイではダメなんだ」という言葉です。
何気なく入学した自分にとって、この言葉が
その後の歩みを問い直すきっかけとなりました。
今回、先生の言葉に自分の歩みを問い直すこ
縁を、みなさまと共にいただければと思いま
す。

【著書】「ボランティアは親鸞の教えに反する
のか」(法蔵館)



元帯広大谷短期大学学長

中川 皓三郎

なかがわ こうさぶろう

「浄土真宗」

8月30日(水)

1943年 大阪府生まれ。
中川先生は今年74歳になります。私とは40歳差、
法然上人と親鸞聖人と同じ年の差です。何故生き
ているのか、何のために生きているのか、焦り諦
めそうになる私に、そんな先生は「僕も最近に
なつてようやくわかってきたようなことがある」
と言います。
先生から頂いた「お前も死ぬぞ」「いのちみな
生きらるべし」という書を目にする度、先生も
きつと「生きる」ということを課題とされ続けて
こられたのだと思います。
今の先生の言葉を「聞」の場で聞くこと。今の私
の生きる力となっています。
【著書】「いのちみな生きらるべし」(東本願寺)「ほ
んとうに生きるということ」(東本願寺)

第五十三回 夏季公開仏教講座



【7月】 9日(日) 瓜生 崇

10日(月) 藤原 正寿

19日(水) 木村 泰子

20日(木) 栖雲 深泥

29日(土) 鶴見 晃

30日(日) マイケルコンウエイ

【8月】 9日(水) 本多 雅人

10日(木) 木村 宣彰

19日(土) 近藤 龍磨

20日(日) 木越 康

29日(火) 伊藤 元

30日(水) 中川 皓三郎

【場所】 金沢東別院 金沢市安江町15-52 「問い合わせ」金沢教務所 076-265-5191

※金沢東別院「工事のため、駐車場に限りがあります。あらかじめご了承ください。」

講座時間 午後6時50分～8時30分まで
聴講券 全12講座…3000円 一日券…800円 未成年者無料
会場 金沢東別院 真宗会館ホール

※聴講券は、金沢教務所・金沢別院・各寺院・教会にて取り扱っております。
※聴講券は開催中も、受付にてお買い求めいただけます。

滋賀県 女照寺 住職
日本脱カルト協会理事

大谷大学准教授

大阪市立大空小学校
初代校長

開徳陽舎
(こもれびしご)舎幹

静岡県 善正寺
教学研究所所員

大谷大学文学部
専任講師(真宗学)

東京都 蓮光寺 住職
東本願寺 同期会館教務

富山県 報土寺 住職
鈴木大拙館館長

岐阜県 廣専寺 住職
大谷大学学長

福岡県 徳進寺 前住職
元帯広大谷短期大学学長

「浄土をもちろて娑婆におる」

「あなたに居場所がありますか?」

「みんながつくる みんなの学校 いつもいっしょがあたりまえ」

「真宗(親鸞聖人)に出遇って」

「証知生死即涅槃」

「本願との出遇い」

「親鸞聖人の教え「安心して迷うことができる生活」

「この身のすくい」

「ライブイン・浄土の真宗「縁尊し」

「善導独明仏正意」

「教えてもらってすくわれる道」

「浄土真宗」

滋賀県 玄照寺 住職
日本脱カルト協会理事



瓜生 崇
うりう たかし

「浄土をまろうて 娑婆におる」

7月9日(日)

1974年 東京都生まれ。

1993年に浄土真宗親鸞会に参加し、2005年に脱会。現在は真宗大谷派の住職として、自身の経験を元にカルト問題対策に取り組みでおられます。「私」が歩んでいく仏道、その道は誰も代わってくれない道であり、法話とは聞く人と話す人が一緒に仏道を歩む場所です。」先生の人生の求道を通した言葉からは、共に仏道を歩まんとする思いが力強く感じられます。今年も先生と共に「私」の仏道を皆さんと歩んでいければと思います。

【著書】『よなら親鸞会』、同書Kindle版(サンガ伝道叢書刊行会)

1963年 石川県生まれ。

聞法するということは、「自分にとって都合のよいものを手に入れ、身につけるために聞くのではなく、日常の生活の中で本当に依りどころとすべきものを見失って、むしろ依りどころとすべきではないものを依りどころとしているのではないかとということをはつきりさせる、問いかけという意味を持つのではないでしようか」とおっしゃっています。

私たち一人一人が聞法によって自身を問いかけるということは、日頃忙しい生活の中で、自分の姿勢を見つめ直すきっかけをあえてくれるのだと思います。今回の「聞」が自分を問い直す場になればと思います。

【著書】『クリシタンが見た真宗(東本願寺)』

大谷大学准教授



藤原 正寿
ふじはら まさとし

「あなたに居場所はありますか?」

7月10日(月)

1971年 静岡県生まれ。

昨年の夏季公開仏教講座「聞」において、「どのように読んできたのか」という先生の言葉に、私自身の問いをいただきました。毎日、お経を読んでいるだけになってしまっていたのではないかのように受けとめていたのではないかと感じました。

現在、真宗教化センターしんらん交流館内の教学研究所員として尽力されており、先生の出会いや学びを通してお話を、本年も是非お聞きしたいと思っています。

静岡県 善正寺
教学研究所所員



鶴見 晃
つるみ あきら

「証知生死即涅槃」

7月29日(土)

1976年 アメリカ合衆国イリノイ州生まれ。

マイケル先生は一方では七高僧のお一人道練、他方では近代教学の研究を進めていらつしやいます。実は先生とは専攻が違ったこともあり仏教のお話をしたことがほとんどありません。いつも休憩時間に先生の研究室にお邪魔して美味しいお菓子を御馳走になっていたことが思い出されます。

印象的なことは、先生の披露宴で日系アメリカ人の開教師の方が、「キリスト教における大切なつながりは神と人間の契約関係です。けれども仏教の大切なつながりは、インドラの網といつて多くのものとながつて私たちが存在していること」と祝辞を述べられたことです。アメリカで真宗に出遇われたマイケル先生に、金沢でお話をしていたたくご縁を、ぜひみなさんと一緒に頂きたいと思っています。

大阪市立大空小学校初代校長



木村 泰子
きむら やすこ

「みんながつくる みんなの学校
~いつもいっしょがあたりまえ~」

7月19日(水)

大阪府出身

先生は、大阪市立大空小学校初代校長として、「みんながつくる みんなの学校」を合い言葉に、「子ども教職員保護者地域のみんなが育ち合う教育」を具現化されました。その様子はドキュメンタリー映画「みんなの学校」で生き生きと表現されています。様々な立場や世代を超えて、「育ち合う教育」の根本にある先生の「人間を敬い、尊重する姿勢」に私たちのあり方を学びたいと思います。

【著書】『みんなの学校』が教えてくれたこと(小学館) 『みんなの学校』流自ら学ぶこの育て方(小学館) 『21世紀を生かす力』(水玉舎)

1945年 山口県生まれ。

私たちは教えを聞くといっても、ついつつ自分自身のことを抜きにして、他人事のように聞いてしまうことがあります。それは、ご法話をされる先生でも起こりうることです。

しかし、栖雲先生は、決して自分を抜きにはされません。教えを通して出遇った人間の悲しみ、人間の悲しみを通して出遇った教えの喜びを、誰のこともない自分自身のこととしてお話されます。

栖雲 深泥
すくも じんじ

「真宗(親鸞聖人)に出遇って」

7月20日(木)

自分自身に出遇うために、皆さんと一緒にご聴聞させていただきます。

【著書】『現代社会における浄土真宗』(共著/白照社出版) 『人間の時代』異質との共存(樹洩陽舎)

樹洩陽舎(こもれびしゃ) 舎幹



東京都 蓮光寺 住職
東本願寺 同朋会館 教導



本多 雅人
ほんだ まさと

「親鸞聖人の教え
「安心して迷うことができる生活」

8月9日(水)

1960年 東京都生まれ。

私は以前、先生のお話の中で苦悩の大切さ、ということを知りました。苦悩し行き詰まったところで、はじめて親鸞聖人の言葉に出遇い、うなずかされるということの大切さをです。先生は「迷いや苦しみがなくなるのではなく、また自分が消えてなくなるわけでもありません。如來に出遇うというのは、自分でない感覚を破って安心して迷い悩むことができる道が開かれること、つまり苦悩が生きる力に転換されることなのです。如來に出遇うということは本当の自分に出遇うということと別ではありません」と説かれます。「聞」での聴聞が、苦悩する自分を否定せず、その苦悩と共に歩むひとつのきっかけになってくれれば、と思います。

1943年 富山県生まれ。

先生は中国仏教を専門とされ、現在は鈴木大拙館の館長をなさっています。

ある先輩の結婚式で、先生は祝辞として「牡丹花は 咲き定まりて 静かなり 花の占めたる位置の確かさ」と木下理玄の歌をよまれました。高砂台にいらつしやる新郎新婦お二人を牡丹にたとえて、かつそれぞれ人間が懸命に生きる姿を牡丹にたとえていらつしやったことが印象に残っております。生きることを何かにたとえることは、哲学的な思索です。

みなさんとともに、木村先生のお話を頂戴したいと思っています。

富山県 報土寺 住職
鈴木大拙館 館長



木村 宣彰
きむら せんしやう

「この身のすくい」

8月10日(木)